

スピロジクロフェン

1. 評価対象農薬の概要

1. 物質概要

化学名	3-(2,4-ジクロロフェニル)-2-オキソ-1-オキサスピロ[4.5]デカ-3-エン-4-イル=2,2-ジメチルプロパト				
分子式	C ₂₁ H ₂₄ Cl ₂ O ₄	分子量	411.3	CAS NO.	148477-71-8
構造式					

2. 開発の経緯等

スピロジクロフェンは、殺ダニ剤であり、ダニ類の脂質合成を阻害することにより殺虫活性を有する。本邦での初回登録は2003年である。

製剤は水和剤が、適用作物は果樹がある。

原体の輸入量は14.8t(17年度)、11.7t(18年度)、19.5t(19年度)であった。

年度は農薬年度(前年10月~当該年9月)、出典:農薬要覧-2008-((社)日本植物防疫協会)

3. 各種物性

外観	白色粉末、無臭	土壌吸着係数	土壌存在下で不安定なため測定不能
融点	94.8	オクタノール / 水分配係数	logPow = 5.83(pH4、20)
沸点	375 で分解のため測定不能	生物濃縮性	BCFss = 1.8(20 μg/L)
蒸気圧	2.8 × 10 ⁻⁷ Pa (20) 6.5 × 10 ⁻⁷ Pa (25)	密度	1.29 g/cm ³ (20)
加水分解性	半減期 63.6日 (pH4、25) 30.8日 (pH7、25) 1.9日 (pH9、25) 3.1日 (pH4、50) 2.5日 (pH7、50)	水溶解度	50 μg/L (pH4、20)

	0.4日 (pH9、50)		
水中光分解性	半減期 28.8日 (東京春季太陽光換算約 270日) (緩衝液、pH4、25、925W/m ² 、300-800nm) 23.1日 (東京春季太陽光換算約 260日) (緩衝液、pH4、25、1,092W/m ² 、300-800nm) 99.4日 (東京春季太陽光換算約 1,100日) (緩衝液、pH4、25、1,092W/m ² 、300-800nm) 10.8日 (東京春季太陽光換算約 73日) (緩衝液、pH4、25、668W/m ² 、300-800nm) 20.7日 (東京春季太陽光換算約 149日) (自然水、25、712W/m ² 、300-800nm) 21.3日 (東京春季太陽光換算約 168日) (自然水、25、782W/m ² 、300-800nm)		

．水産動植物への毒性

1．魚類

(1) 魚類急性毒性試験 (コイ)

コイを用いた魚類急性毒性試験が実施され、96hLC₅₀ = 1,020 μg/Lであった。

表1 コイ急性毒性試験結果

被験物質	原体					
供試生物	コイ (<i>Cyprinus carpio</i>) 10尾/群					
暴露方法	半止水式					
暴露期間	96h					
設定濃度 (μg/L)	0	500	660	870	1,100	1,500
実測濃度 (μg/L) (時間加重平均値)	0	330	490	610	880	1,210
死亡数/供試生物数 (96hr後;尾)	0/10	0/10	0/10	0/10	5/10	6/10
助剤	メチルセロソルブ/硬化ヒマシ油(HCO-40)(15:85) 33-100mg/L					
LC ₅₀ (μg/L)	1,020(95%信頼限界 870-1,350) (実測濃度に基づく)					

2．甲殻類

(1) ミジンコ類急性遊泳阻害試験 (オオミジンコ)

オオミジンコを用いたミジンコ類急性遊泳阻害試験が実施され、48hEC₅₀ > 1,190 μg/Lであった。

表2 オオミジンコ急性遊泳阻害試験結果

被験物質	原体	
供試生物	オオミジンコ (<i>Daphnia magna</i>) 20 頭/群	
暴露方法	止水式	
暴露期間	48h	
設定濃度 (µg/L)	0	1,500
実測濃度 (µg/L) (時間加重平均値)	0	1,190
遊泳阻害数/供試生物数 (48hr 後; 頭)	0/20	0/20
助剤	メチルセロソルブ / 硬化ヒマシ油(HCO-40) (15:84.9) 99mg/L	
EC ₅₀ (µg/L)	>1,190 (実測濃度に基づく)	

3. 藻類

(1) 藻類生長阻害試験

Pseudokirchneriella subcapitata を用いた藻類生長阻害試験が実施され、72hErC₅₀ > 1,090 µg/Lであった。

表3 藻類生長阻害試験結果

被験物質	原体	
供試生物	<i>Pseudokirchneriella subcapitata</i> 初期生物量 1×10^4 cells/mL	
暴露方法	振とう培養	
暴露期間	72h	
設定濃度 (µg/L)	0	1,500
実測濃度 (µg/L) (幾何平均値)	0	1,090
72hr 後生物量 ($\times 10^4$ cells/mL)	216.6	209.6
0-72hr 生長阻害率 (%)		0.6
助剤	メチルセロソルブ / 硬化ヒマシ油(HCO-40) (15:85) 100mg/L	
ErC ₅₀ (µg/L)	>1,090 (実測濃度に基づく)	
NOECr (µg/L)	1,090 (実測濃度に基づく)	

環境中予測濃度（PEC）

1. 製剤の種類及び適用農作物等

本農薬の製剤として水和剤があり、果樹に適用がある。

2. PECの算出

(1) 非水田使用時の予測濃度

第1段階における予測濃度を、PECが最も高くなる果樹への水和剤における以下の使用方法の場合について、以下のパラメーターを用いて河川ドリフトによるPECを算出する。

表4 PEC算出に関する使用方法及びパラメーター（非水田使用第1段階）

PEC算出に関する使用方法		各パラメーターの値	
剤型	38.0%水和剤	I : 単回の農薬散布量（有効成分 g/ha）	1,330
農薬散布液量	700L/10a	D_{river} : 河川ドリフト率（%）	3.4
希釈倍数	2,000倍	Z_{river} : 1日河川ドリフト面積（ha/day）	0.12
地上防除/航空防除	地上	N_{drift} : ドリフト寄与日数（day）	2
適用作物	果樹	R_u : 畑地からの農薬流出率（%）	0.02
施用法	散布	A_u : 農薬散布面積（ha）	37.5
		f_u : 施用法による農薬流出係数（-）	1

これらのパラメーターより非水田使用時の環境中予測濃度は以下のとおりとなる。

非水田 PEC_{Tier1} による算出結果	0.021 $\mu\text{g/L}$
---------------------------	-----------------------

. 総合評価

(1) 登録保留基準値案

各生物種の LC_{50} 、 EC_{50} は以下のとおりであった。

魚類（コイ急性毒性）	$96hLC_{50} =$	1,020	$\mu g/L$
甲殻類（オオミジンコ急性遊泳阻害）	$48hEC_{50} >$	1,190	$\mu g/L$
藻類（ <i>Pseudokirchneriella subcapitata</i> 生長阻害）	$72hErC_{50} >$	1,090	$\mu g/L$

これらから、

魚類急性影響濃度	$AECf = LC_{50}/10 =$	102	$\mu g/L$
甲殻類急性影響濃度	$AECd = EC_{50}/10 >$	119	$\mu g/L$
藻類急性影響濃度	$AECa = EC_{50} >$	1,090	$\mu g/L$

よって、これらのうち最小の AECf より、登録保留基準値 =100 ($\mu g/L$) とする。

2) リスク評価

環境中予測濃度は、非水田 $PEC_{Tier1} = 0.021$ ($\mu g/L$) であり、登録保留基準 100 ($\mu g/L$) を下回っている。

< 検討経緯 >

2009年10月9日 平成21年度第4回水産動植物登録保留基準設定検討会